

仏師賢円―円派仏師研究（四）―

武笠 朗

本稿執筆者はこれまで、円派仏師研究として仏師長勢、円勢、長円を取り上げ、その事績研究を行なってきた¹⁾。本稿はその（四）で、円勢息で長円弟の仏師賢円を論ずる。賢円についてはこれまで比較的多くの論究がなされてきた。それを越える大きな成果があるわけではないが、これまで論じてきた円派仏師研究の分脈で事績を検討し、賢円の性格を明らかにしてみたい。賢円事績は後掲の年譜にまとめ、円派仏師系図（試案）も載せたので、適宜ご参照いただきたい。

賢円の語られ方

円派仏師の中で最も知られているのが賢円である。それは、小林剛が京都・安楽寿院阿弥陀如来像を賢円の作として事績とともに紹介した後、円派仏師の代表のように見做されてきたからである。賢円については、これまでに、黒川春村をはじめとして、小林剛、西川新次、伊東史朗、根立研介などが、論文あるいは概説中などさまざまな形で論究されてきた。また斎藤孝や榊拓敏などはその主要事績である鳥羽勝光明院造像を論ずる中で賢円に触れている²⁾。

その中で注目すべきは小林剛の「仏師法印賢円」であろう。賢円を日

本彫刻作家と見做した最初の賢円論である。彼の事績を列挙した上で、その遺作として安楽寿院像を上げ、保元元年（一一五六）鳥羽上皇崩御時の作とみなした。賢円は「まったくの宮廷仏師」で「院関係の仕事ばかり」していたとしつつ、安楽寿院像に対して「古い藤原和様を保持しながら」「多少の新しいやり方を試みている」と評価した。「政治的な手腕」の目立つ兄長円に比べて「おとなしい人柄」だが、「仏師の本業だけにいそしんでいたらしく」、そのことがむしろ賢円の系譜の継続を導いたとするなど、彼の性格にまで及んだ。小林は論の最後に、仁平四年（一一五四）藤原頼長発願奉為鳥羽上皇の薬師造像の造仏料として、「家貧無貯」を理由に宅地を要求したことに対して、不審感を示しつつ、その理由については「あまりに私的な問題」なので「これ以上に詮索しないでおきたい」と締めている。

この問題に対して最新の根立研介氏の論考は、「家貧無貯」について、馬一疋と土地の戸主では額が隔たりすぎで、いくら法印賢円でも無謀な要求というべきで、この要求は、鳥羽上皇との関係を背景にした賢円の政治的な発言とみるべしとする。賢円の後ろ盾鳥羽上皇の存在があり、鳥羽上皇の摂関家対応の一環として、藤原頼長を牽制するために賢円に無謀な要求をさせたか、と推定した。長円の清水寺別当補任も鳥羽

上皇の興福寺対応の一環と捉える根立見解は、最新の院政期政治史の成果を踏まえて、大きな歴史的枠組みの中に仏師を相対化しようとする方法論で、たいへん興味深く注目される。

一方、当時の造像における施主側の詳細な要求とそれに対応する仏師というスタンスで、賢円の、現存しないが代表作というべき鳥羽勝光明院造像を論じているのが斉藤氏や榊氏の論考である。斉藤氏は、「賢円の仏像製作には、彼自身の芸術意志がどれ程反映する余地があるか」「その様式が決定される背後に、貴族の意志が大きく作用を及ぼしてはいないであろうか」という問題意識を明確にしている。

本稿執筆者としては、相対化し過ぎるのでなく、個を埋没させるのではなく、もう少し仏師の「個」に迫りたいと考える。これまで同様、事績の詳細を、特に発願主との関係を中心に検討し、併せて事績から波及する院政期造像の諸問題に言及する、というスタンスである。事績個々をある程度深読みしてでも、彼の性格を読み込みたいと考える。

円勢・長円との造像

賢円の知られている事績は永久二年（一一一四）から久寿二年（一一五四）までで、その間四十一年間の活動が確認できる。久寿二年を最後に事績が途絶えるので、ほぼその頃が没年とみてよいであろう。さかのぼって生年はいつ頃であろうか。

賢円の知られている最初の事績、及びそれによって円勢の譲りで法橋に叙されたのが永久二年（一一一四）である。その時の年齢を二十五歳とすれば西暦一〇九〇年、寛治四年生まれとなる。一〇九〇年前後頃の生まれで、兄長円とは十歳程の年齢差かと想像される。とすれば没年齢

は六十五・六歳となり、一応程良い年齢に落ち着くことになる。

永久二年（一一一四）十一月二十九日、白河上皇御願の白河泉殿九体阿弥陀堂が供養された。円勢の主導下長円と賢円が参加しての造像であった。供養当日の勸賞で、『中右記』は円勢の譲りで「忠円」が法橋に叙されたとするが、『殿暦』は「法印円勢次郎」とするのみのみで、『白川御堂供養記』（『雅兼記』）は「法橋長円弟子」の「慶円」、彰考館本『僧綱補任』では「円勢二郎」の「円経」とする。小林剛は、ここに出る忠円を円勢の嫡男乃至次男とする黒川春村や谷信一の説を否定し、忠円が正しく賢円の一男である（後述する）ことを踏まえて、忠円と出るのは誤解誤記で円勢二男として賢円が正しいことを示した。⁴この時の勸賞については、長円のことも含めて諸史料の示す情報が錯綜しているが、唯一『為房卿記』が整合性のある話を伝えている。それによると十一月十九日の御仏奉渡に際して法印円勢が馬と被物、法橋長円が被物を賜り、供養日の勸賞で大仏師円勢の譲りで賢円が法橋に叙され、法橋長円の賞は追って申請すべしとされたことが知られる。さすがに兄弟二人への勸賞は憚られたとみられ、円勢が遠慮したのか、いずれにせよ長円の昇叙は結局先延べとなったらしい。御仏奉渡時の給禄のことまで具体的に伝えているので、これを信すべきと思われる。⁵この時の錯綜の原因は、史料の各日記記主の認識の中に賢円が入っていなかったことにあるのだろう。すでにデビューして法橋位にあった長円の名は認識されていたものの、弟の賢円はまだ認識の外であった。賢円の造仏界へのデビューがまさにこの事績であったことを示しているかに思われる。

この後父円勢、兄長円との共同造像が続く。天治二年（一一二五）中宮璋子御産御祈仏では円勢・長円と、大治四年（一一二九）二月の待賢門院御産御祈御仏では長円父子（長俊）と、同年七月以降の白河上皇崩

御関連では円勢・長円と、大治五年（一一三〇）故白河院法事では円勢とともに造像し、譲りで法眼に叙された。円勢主導下の造像に参画し、技を磨き、人脈を築いたか想像される。

父円勢は長承三年（一一三四）閏十二月二十一日に没するが、それ以前の天承年間頃から長円賢円ともに、おそらく引退した円勢から離れて独自の道を歩み始める。長円は円勢路線の継承を、賢円は少し異なる方向で活動することになる。長円との共同作業は、六勝寺の残り二つ、成勝寺と延勝寺がある。六勝寺造像には、法勝寺での長勢以来円派は従事し、円勢の尊勝寺以降は円派の寡占状態であったが、鳥羽上皇期のこの二寺も慣例的に円派の受注となったものである。この辺りに、鳥羽上皇とも渡り合った長円の政治性を感じられる。大治四年の待賢門院御産・白河院崩御時の一連の共同作業の中で、長円と賢円の不仲が伝えられたりするが、大規模造像では共同作業をしたということなのである。

得長寿院造像の仏師

事績の検討の最初にまず得長寿院造像を取り上げる。鳥羽上皇の私願になる最初の大規模造像で、長円と賢円が従事した可能性が高い。長承元年（一一三二）三月十三日、鳥羽上皇御願の白河御堂、得長寿院が供養された（『中右記』『知信記』）。丈六一軀、等身千軀の聖観音像を安置した千体観音堂である。史上初の千体堂で、鳥羽上皇の観音信仰が顕著に示される一堂である。その造像は、前年の天承元年十月十日に御仏造始がなされ、仏師五人が各二百体ずつ受け持つ分担であった（『時信記』）。この時の仏師五人は誰であったろうか。後の蓮華王院千体千手観

音堂の仏師推定にもつながるので、ここで検討してみたい。三十三間の堂は平忠盛の造進で、これにより忠盛は昇殿を許された。仏は院庁沙汰であったが、仏師の勲賞は記録には出ない。鳥羽上皇との関係からすると、やはり円派の二人長円、賢円はほぼ確定であろう。二人ともこの期仏師僧綱筆頭の法眼位にあった。そして、二人を中心に、白河上皇没後に復権したとみられる法橋院覚、鳥羽上皇期にその造像を得た法橋康助を加え、残り一枠は円派の誰か（円信あたりか）を入れて考えるのが穏当なところであろうか。あるいは中尊丈六像担当の別枠として、これに長円を当てれば計六人となり、等身像の方にもう一人円派仏師か、あるいは院朝辺りが加わり得たか。いずれにせよ円派中心の仏師選考となつたであろう。それにしても、前年十月十日に作り始めて、翌年の二月二十八日には堂に据えられたというので（『中右記』）、約四ヶ月半で二百体を作り終えたことになる。かなりの即席造像で、この期仏師の工房組織の充実は示されるものの、一体一体の像の作域の粗さを思わざるを得ない。

発願主の傾向

賢円の事績を通覧すると、造像の発願主として、鳥羽上皇を中心にその周辺の待賢門院璋子、美福門院得子、高陽院泰子の三女院、有力貴族としては摂関家の藤原忠実と頼長父子、鳥羽院近臣の藤原家成などの名が上がってくる。白河上皇没後ややあって政情は変貌を遂げていく。白河上皇の後ろ盾を失なった待賢門院に代わって鳥羽上皇の寵愛を得たのが美福門院得子で、また白河上皇期には籠居を余儀なくされていた藤原忠実が復権し、鳥羽上皇に娘高陽院泰子を押し付けて、忠実を後ろ盾に

した高陽院も力を持つに至った。白河上皇の専横状態から鳥羽上皇を中心にしつつも、摂関家の復権などいくつかの力が台頭する状況となった。しかしやはり賢円にとって最も重要な存在は鳥羽上皇であった。上皇関連の造像として注目すべきは、保延二年（一一三六）鳥羽勝光明院と仁平二年（一一五二）鳥羽上皇五十宝算賀の釈迦如来像、そして久寿元年（一一五四）鳥羽金剛心院であろう。

勝光明院

先述のように、勝光明院造像は賢円の重要事績というより、院政期造像の具体的様相を知りうる事例として、とりわけ願主と仏師との関係がうかがえる格好の事例として注目されてきた。ここでは平等院を範としたとされる勝光明院造像の性格について考えてみたい。

勝光明院は平等院を模したとされる。造営経過を伝える『長秋記』や『中右記』の記事の中に、御堂について「御堂東面向前池被写宇治平等院」（『中右記』保延二年三月二十三日条）、「堂中長押上二十五菩薩居像」（『中右記』長押上供養菩薩可摸平等院）（『長秋記』長承三年四月十日条）とある。さらに長承三年（一一三四）五月一日には行事国能が「御仏飾」を模するため、仏師賢円、絵師応源、工季貞等が同行して宇治に向かい、それは「堂構」「仏座光鉢」「柱絵」「鴻梁絵」「供養飛天鉢」「棟上鳳尺寸」を詳しく注取するためであったという（『長秋記』、以下『長秋記』長承三年）。

しかし、とりわけ像内安置の尊像は、阿弥陀如来を中心に二尺以上の像が総計二七四軀に及ぶ膨大な数で、なおかつ堂は二階建てで、二階にも尊像が安置されるという、平等院鳳凰堂とはまったく異なる構成と員

数となっている。しかも阿弥陀の光背台座も全く異なる。光背は身光上に阿弥陀五仏、同下に十二光仏、身光の地に鏡、頭光に鏡、縁光に二十五菩薩が配された（五月二日条）。台座は、「仏所鉢」ではなくて「俊綱朝臣三条堂仏座鉢」（六月四日条）であった。「近來普通仏」（六月三日条）と評された阿弥陀本体も、御仏の胸を切り（本より一寸五分）面を俯せ、衣を直したが、これも「三条俊綱堂鉢」を拵ぶなりという（六月十二日条）。鼻が頗る短少なのは西院仏と同じ（六月四日条）であり、結局、本体、座光ともに鳳凰堂像とはかなり異なるものであったといわざるを得ない。

五月十三日上皇は自ら平等院に御幸しており、平等院を範としたことは確からしいが、それがどこまで及ぶのか、堂の外観にとどまるのか、不明である。少なくともその膨大な尊像の数と尊像構成は、仁和寺高野御室覚法法親王（鳥羽上皇の叔父に当たる）をブレンとして企画された、仁和寺真言系の密教的な阿弥陀曼荼羅的構成が意図されたとみられ、平等院とは異なるというべきであろう。

また注目すべきは、台座や本体の修正で参考にされた「三条俊綱堂鉢」である。阿弥陀及びその莊嚴は「三条俊綱堂鉢」を模したというべきと思われる。榊拓敏氏は、三条俊綱堂の台座は、平等院像の「平座」と異なる背の高い台座で、それに伴って胸を切り詰め面を伏した、と想定した。

三条俊綱堂あるいは「俊綱朝臣三条堂」は、おそらく橘俊綱（一〇二八―一〇九四）の三条堂とみて誤りない。俊綱は橘姓だが藤原頼通の実子で、富裕の人として知られ、歌や作庭を良くした稀代の風流人であった。その伏見の別業は著名だが、居宅は場所が特定できない。「西洞院宅」「但州洞院宅」などと呼ばれ、承暦三年（一〇七九）七月九日白河

帝中宮賢子が堀河帝を産んだ際の里内裏となり、承暦二年十一月に藤原忠実も俊綱邸で生まれているなど、豪邸だったらしい。¹⁰ おそらくそれが三条堂になったか、あるいはそこに三条堂があったのであろう。定朝没が天喜五年（一〇五七）なので、その時まだ三十歳の俊綱（時に正四位下、丹波守）が、定朝在世時に堂の本尊の制作を依頼し得たかは疑問である（実父が頼通であれば若年での注文も不可能ではないが）。俊綱堂の本尊が定朝仏であったかは微妙で、むしろ定朝次世代以降の正系仏師の制作になる像であった可能性が高い。伊東史朗氏も、定朝仏ではなく、「覚助、長勢、あるいは院助、円勢、頼助の世代の作」と考えられるとしている。¹² いささか突飛だが、この像が例えば長勢作であれば、円派の祖の作として、賢円が三条俊綱堂の体を用いた理由として首肯しうる。長勢は藤原資良や源親元といった中流受領層の造像にも当たっていたことが想起される。¹³ 賢円はむしろこのことにこそこだわったのかも知れない。平等院が参考にされ、鳥羽上皇の平等院御幸もあり、一方で、六月十日に源師時は仏師院朝とともに西院故邦恒朝臣堂の定朝仏を見ている。定朝直系の院覚等院派仏師の台頭は、賢円にとって脅威であったろう。平等院像や邦恒堂像の定朝仏を範とした院派に対して、自派のスタイルにこだわりの見せた賢円だったのではなかったか。¹⁴

他派仏師との競合（院覚と康助）

長承元年（一一三二）六月十七日、院覚と賢円は、鳥羽上皇御願とみられる丈六の愛染王と金輪像を造始した（『長秋記』）。像の分担は不明である。それぞれ別個の像とみられるので共同作業というわけではないが、注目すべきは院覚の介入である。鳥羽上皇の院覚の登用は、大治四

年（一一二九）八月二十八日に遡る。この日鳥羽上皇は院西対にて阿弥陀三尊と白檀普賢を造始した。阿弥陀三尊は円勢、普賢は院覚であった（『長秋記』）。院覚の起用について『長秋記』記主源師時は、院覚が康尚以来の「五代大仏子」と伝え、これまでに院の召がなかったが今日初めて召に応じたと記す。¹⁵ まさに院関係造像へ院覚の初登用が示される。院覚造立の普賢は、九月二十八日に行なわれた鳥羽院・待賢門院による結縁経供養、同八講の本尊とされたもので、天蓋と仏壇が付いた「如見生身」像であったという（『長秋記』『中右記』）。おそらくこの造像を契機に、院覚は特期待賢門院との関係を構築し、法金剛院造像に従事するに至ったものであろう。院関係造像の仏師起用にも鳥羽上皇の意向が明確に反映するようになったということであろう。この後長承三年（一一三四）六月の待賢門院発願の半丈六不動を賢円が、等身金色観音を院覚が造立した事例もある。院覚の復権には、先の源師時の言のように、院派仏師の定朝正嫡としての正統性が施主の側に再認識されるということがあったのかも知れない。円派のいわば最大の弱点である正統性の問題が、新たに問われることになってきたらしい。それは定朝仏への回帰、定朝仏の規範性の問題と軌を一にする。

保延元年（一一三五）には法金剛院の北斗堂が供養されたが、御仏「北斗木造」は賢円の造進であった（『長秋記』）。その創建以来、言わば院覚の独壇場であった法金剛院造像に、待賢門院への御仏造進を以て介入しようとした賢円の政略であろうか。

さらに長円没後は、他派仏師との明らかな共同作業が出てくる。仁平元年（一一五一）の高陽院御願福勝院九体丈六阿弥陀造像は奈良仏師康助との共作であり（「丈六仏像造営文書」〔『兵範記』裏文書〕）、¹⁷ 久寿元年（一一五四）の金剛心院阿弥陀堂九体丈六阿弥陀造像は院尊との共作

『兵範記』『台記』であった。金剛心院の方では、勸賞を院尊に譲与し法橋にさせている。

院尊への勸賞譲与は、他派仏師への勸賞譲与の初例となる。これはどう解釈するべきか。院尊は院覚の弟子乃至は子とされる。院覚は興福寺本『僧綱補任』保延七年(一一四一)条に「法眼院覚」と出るのを最後に消息を絶つ。おそらくこの後程なく没したのであろう。最後の事績は保延二年(一一三六)の法金剛院三重塔造像で、その造像勸賞を弟子の院朝に譲って法橋にした(『長秋記』)。結局この院朝が院覚後継となり、長寛元年(一一六三)十二月二十六日供養の延勝寺阿弥陀堂の丈六九体阿弥陀造像¹⁸まで活動が知られるが、院尊との関係は全く出てこない。この問題はまた院派仏師を論ずる中で検討すべきことだが、おそらく院覚没後後盾を失った院尊は、賢円との協同を余儀なくされたとみるべきか。賢円側の事情も当然あったとみられるが、これについては明らかにしたい。

賢円の他派仏師との共同作業をどう考えるべきか。円勢には院助というライバルがいた。しかし長円には他派仏師との共同作業はほとんどなかった。正確に言うと、長円の事績に円派以外の仏師の名が出ることはなかった。賢円の長円とは異なる立ち位置を示すように思われる。同世代の他派仏師の台頭で、それとの共作にも応じざるを得なかった賢円ということか。また院覚は前出の「生身を見る如き」普賢を造り、大治五年六月には待賢門院の「法服地藏」を造立し(『長秋記』)、降って康治元年(一一四二)、弟子の院朝は白河北殿東小御堂に「乗紫雲像」の「迎接本像」金色半丈六阿弥陀三尊像を造立した(『本朝世紀』『百鍊抄』)。これらの例のように、日記等史料にそのことが注記されるようなやや異なった像容の尊像を院派仏師は造立しており、そうした目新しさ

が院派の特徴として願主の関心を誘うことになったものであろう。そうした図像の様式的工夫の欠如が、正統性の欠如と併せて円派の衰退を導いたのかも知れない。

金剛心院造像

ここで改めて久寿元年(一一五四)供養の金剛心院造像をみておこう。ここで法印賢円は、院尊とともに阿弥陀堂の丈六九体阿弥陀像の造像に当たった。また同院釈迦堂の丈六釈迦及び八尺普賢文殊、五尺五寸四天王は奈良仏師の法眼康助と康朝の造像であった。『兵範記』『台記』にかなり詳しい記述があり、それによると、金剛心院は釈迦堂と阿弥陀堂、御所から構成され、釈迦堂と御所は宇治入道藤原忠実の沙汰で播磨守源顕親の造営、阿弥陀堂は中納言藤原家成の沙汰で家成息備後守家明の造営であったという(『兵範記』仁平三年(一一五三)四月二十日条)。鳥羽上皇の近臣として大きな力を誇った家成と白河院没後に復権した忠実が沙汰した造堂であった。ただ、同年五月二十九日に家成は没しており、結局忠実が鳥羽上皇に対して存在感を大きくすることとなった。忠実息の藤原頼長は、その日記『台記』に、阿弥陀堂の「龕荒」、釈迦堂と御所の「華麗」「華美」を、鳥羽上皇の叡慮と院中上下の伝聞として誇らしく伝えている。¹⁹ここに、鳥羽上皇をめぐる勢力争いの構図の中に組み入れられた仏師の立ち位置が浮かび上がる。興福寺の檀越である藤原摂関家の造像に介入した康助等奈良仏師、鳥羽上皇との関係性をもとに最側近の家成沙汰の造像に与した賢円であった。藤原家成関係の造像に、家成の八条堀川堂の不動と懺法堂小仏が知られる(『長秋記』)²⁰。家成家の退潮と忠実の復権という宮廷勢力図の再編と、円派の

衰退と奈良仏師の台頭という、この後の後白河上皇期へと連なる仏師界の再編がリンクした金剛心院造像であった。忠実の復権には、娘藤原泰子の入内があった。

高陽院泰子と藤原忠実・頼長

高陽院泰子（一〇九五―一一五六、はじめは勲子）は藤原忠実の三女で母は源師子、異父兄に覚法、同母弟に忠通、異母弟に頼長がいる。白河上皇没後に復帰した忠実は、摂関家復権の策として、長承二年（一一三三）に鳥羽上皇のもとに入内させ、翌年には皇后に冊立した（この時に泰子と改名）。保延五年には高陽院の院号宣下があり女院となった。皇子女のいない泰子は立后後、美福門院得子所生の皇女叡子内親王を養女としてこれを寵愛した。この叡子がわずか十四歳で早逝したのだが、久安五年（一一四九）十月十一日泰子はその一周忌法事を行ない、その大日如来像を賢円が造立した（『兵範記』）。さらにこのあと、仁平元年（一一五一）には高陽院御願の白河御堂福勝院の丈六九体阿弥陀と半丈六観音勢至像を、賢円は康助との分担で造像している（「丈六仏像造営文書」）。この造像は実質藤原忠実の造営であったとみられる。²²さらに久寿元年（一一五四）には、藤原頼長発願の鳥羽上皇病氣平癒のための等身薬師及び五寸千体薬師を造像している（『台記』）。いずれも高陽院と忠実・頼長関連で、その造像に関与した賢円であった。これをどう解釈すべきか。賢円の起用は忠実の意向か、それとも賢円側のアプローチがあったためか。忠実とすれば、この時期なら康助を使えばよいのだが、そこに賢円が入っているのはなぜか。やはり高陽院関係造像として院主体の仏師選択が基本で、むしろそこに忠実の意向が反映して康助の

起用となったと解釈すべきか。頼長発願造像の給祿の際に、賢円が家の貧困を訴えて一戸主を求めて許された前述の一件が起きる。これについての答えの持ち合わせは今ないが、忠実・頼長と賢円の、鳥羽上皇のもとでの言わば上下関係がどうであったかが、この一件を理解するポイントとなる。

後継者

賢円の後継者は実子忠円であった。忠円は保延五年（一一三九）供養成勝寺の造像に賢円のもとで従事し、賢円の譲りで法橋に叙された。『僧綱補任』裏書には「賢円子」とあり、正嫡とみてよいだろう。その後康治二年（一一四三）には後白河上皇女御源懿子御産御祈の造像に法眼として当たったことが知られるが（『御産部類記』）、その後の消息がたどれない。ただこの忠円の子が明円で（残欠本『僧綱補任』寿永二年〔一一八三〕条）、この系譜こそ、鎌倉期に至る円派の系譜を引き継いだものらしい（後掲系図参照）。

黒川春村『歴代大仏師譜』や小林剛以降、仏師系図等で仏師元円を賢円の子とするのが一般的である。残欠本『僧綱補任』の寿永二年（一一八三）の条に、仏師「法橋元円」を載せ「賢円子」と注記する。これを以て黒川春村以来、賢円の子と見做されてきたようだが、元円の知られている唯一の事績である久安三年（一一四七）安楽寿院九体阿弥陀堂造像では、元円は長円の譲りで法橋に叙されており（『本朝世紀』）、『台記』でもこれを長円の譲りとしている。元円は長円の系譜である可能性が高い。『究竟僧綱補任』では、「法橋玄円」を「長順子」と載せ、この玄円が元円で、長順が長俊なら、元円は長円子長俊の子の可能性が出て

こよう。つまり長円の孫となる。²³元円が賢円の子である可能性は低いように思われる。

賢円の弟子として円春がいる。円春は陸奥守源信雅の子で本名光義、長円の孫に当たり、長円弟子から移籍して賢円弟子となった、貴族出身の仏師であった。²⁴結局長円舎弟を殺害して常陸国に流されるという数奇な生涯をたどった。長円の娘が貴族社会に入り込んだ結果と見做される事例であるが、長円との不仲からそのもとを離れた円春をなぜ賢円が引き取ったのかは疑問である。あるいはこの辺りに、長円と賢円の兄弟間の交流、あるいは叔父甥の仲を想像することができるのかも知れない。この長円と円春のような事例が賢円にもあったらしい。

久寿二年（一一五四）五月二十四日、藤原光経が昇殿を許された。その母は法印賢円の女という（『兵範記』）。光経は文章博士長光息で、多くの願文で知られる敦光の孫である。法印賢円は、この頃では仏師の賢円を除いて該当する人物を比定しがたい。娘が存在したこと自体賢円が純然たる僧ではなく仏師であることを示すだろう。いわゆる員外僧綱には、石清水八幡や熊野社の社僧もいるが、該当するものはいない。とすると、やはり仏師であろう。賢円の娘が長光に嫁し、その間に光経が生まれたということか。円勢や長円と同様に、こうした手段で円派仏師は宮廷社会に入り込んでいったらしい。おそらく院派でも同様であったかとみられる。

鳥羽上皇五十宝算釈迦像と安楽寿院阿弥陀如来坐像

最後に、安楽寿院阿弥陀如来坐像との関係で、鳥羽院五十宝算の釈迦像について触れる。鳥羽上皇と賢円の密接な関係が端的に示され、また

院政期造像の美麗な様相をかなり具体的にイメージしうるのが、仁平二年（一一五二）三月七日に鳥羽南殿で行なわれた鳥羽上皇五十宝算賀の釈迦如来像である。賢円の最も有名な事績といえる。前日六日に南殿内の仏殿に安置された本尊等身皆金色釈迦如来像は、胸に朱の「満字」があり、像内は金箔押しで、光背は金銅飛天光、鏡や金銅製金具を併用した蓮華座で、その上に種子を書いた月輪を立てた像であったという。『兵範記』記主平信範は「尊像莊嚴、仏殿華麗、併難録筆端」とこの像を評している。院主催の造像で、仏殿の行事は藏人弁平範家という。この像の様子が安楽寿院阿弥陀像を彷彿とさせるので、安楽寿院像を賢円の作とする説が小林剛によって出された。²⁵安楽寿院像は胸に朱の卍があり、像内漆箔が施されていてこの像と共通するが、光背は木造で、台座に銅製金具は見られず光背台座は一致しない。

今から三十六年前の一九八六年に、本稿執筆者はこの像に関する論文を書いた。²⁶この像が、鳥羽上皇終焉の地安楽寿院に鳥羽上皇の葬塔となすべく建立された三重塔の本尊として、保延五年（一一三九）に長円工房によつて造立された、との見解を示した。長円工房との記載が誤解を生じさせたが、長円かその弟子円信か、という真意であった。今回紙数の都合上この像への言及ができないが、基本的に現在もこの見解を変え必要性を感じていない。前稿でも触れたとおり、像内漆箔や像内納入の心月輪はこの時期の造像としては一般的で賢円の個性とするにはやや弱く、安楽寿院造像での仏師起用から推しても、やはり長円か円信となるかと思われる。ただし、その作風は康和五年（一一〇三）円勢・長円作の仁和寺旧北院薬師如来像や久安元年（一一四五）円信作の西大寺四王堂十一面観音像と異なることは認めざるを得ない。こうした細面で細身の造形を鳥羽上皇期の様式展開にどう載せていくか、改めて別稿にて

考えてみたい。

おわりに

今回の検討の結果をまとめておく。まず、やはり改めて賢円の鳥羽上皇との関係性の強さが注目された。それは兄長円が、嫡系として円勢の造像を継承した感があるのに対し、鳥羽上皇にとって賢円は、円派主流ではあるが、故白河院と深く繋がった円勢・長円とは違ってその関係性がやや希薄で、そのことでまさに側近的な仏師となりえたのだろう。基本的に円派仏師を多用するも、賢円を中心に他派仏師も交えて造像に当たった鳥羽上皇のスタンスが見えてくる。

また、院覚や康助など他派仏師との共同造像の問題にも言及した。院覚の台頭についてはその定朝嫡系としての正統性が、康助については藤原忠実の復権が注目されたが、そうした二人との共作を余儀なくされるに至った賢円を中心とする円派仏師の退潮の兆候がほの見えた。

細かいことだが新たな見解としては、勝光明院造像における三条俊綱堂の意義について触れた。賢円にとって重視すべきは、円派のスタイルであったとの想像である。院政期造像で範とされたのが、平等院像や邦恒堂像だけではなかったことはすでに指摘されているが、さらにいえば定朝仏だけでもなかったかも知れないのである。というか、とりわけ定朝仏が珍重されるようになったのは、まさに鳥羽上皇期以降のことというべきなのかも知れない。賢円にとっては、願主や源師時のような造像を差配する中流貴族たちの間に定朝仏や院派仏師の正統性の認識が普及し、円派のスタイルが脅かされるのは脅威であったのではなかったか。また、賢円の孫藤原光経についての指摘はこれまではなかった。ただ

し、このことが賢円やその後の円派の動向に影響を及ぼしたかどうかは、今後の検討に委ねたい。最後に、安楽寿院阿弥陀如来像の様式的検討を約してこの稿を閉じる。

注

1 武笠朗「仏師長勢―円派仏師研究（一）―」「仏師円勢―円派仏師研究（二）―」「仏師長円―円派仏師研究（三）―」（『実践女子大学美術史学』三四・三五・三六）二〇二〇年・二〇二一年・二〇二二年。

2 黒川春村『歴代大仏師譜』「卷之上」、『墨水遺稿』三所収、吉川半七、一八九九年。小林剛「仏師法印賢円」（『大和文華』二二）一九六三年、『日本彫刻作家研究』所収、有隣堂、一九七八年。西川新次「藤原彫刻」（『工藤圭章・西川新次『阿弥陀堂と藤原彫刻』（『原色日本の美術』六）所収）小学館、一九六九年。伊東史朗「院政期仏像彫刻史序説」（『院政期の仏像―定朝から運慶へ―』所収）京都国立博物館、一九九二年。根立研介「院政期の僧綱仏師をめぐる仏像制作の場」（『長岡龍作編『造形の場』（『講座日本美術史』四）所収）東京大学出版会、二〇〇五年、同論考を改稿し「僧綱仏師と仏像製作の場―法印賢円を中心にして―」として『日本中世の仏師と社会』（塙書房、二〇〇六年）に収載。同「院政期の仏師工房をめぐる小考」（中村俊春編『芸術家と工房の内と外―学習・共同制作・競争の諸相』（『科学研究費成果報告書』所収）二〇一三年。斉藤孝「鳥羽勝光明院の造仏をめぐる問題―藤原彫刻の創造に於ける貴族の役割―」（『美学論究』三）一九六三年。榊拓敏「鳥羽勝光明院における造仏活動―仏像修正の理由を中心に―」（『博物館学年報』三七）同志社大学博物館学芸員課程、二〇〇六年。これ以外に、歴史学の方から浅香年木、田中嗣人などの論考がある。

- 3 前掲黒川論考（注2）、谷信一「円勢法印考」（『美術研究』三〇）一九三四年。
- 4 小林剛「仏師系譜の訂正」（『佛教藝術』六）一九五〇年、『日本彫刻作家研究』（前掲注2）所収。
- 5 前掲武笠長円論考（注2）。
- 6 次の論考で蓮華王院造立仏師の推定を行なっている。武笠朗「蓮華王院長寛造像の研究（一）―創建の経緯と造立仏師の検討―」（『実践女子大学美学美術史学』二二）二〇〇七年。
- 7 前掲斉藤、榊、根立論考（注2）。造宮経過の詳細はこの三論考に詳し
い。
- 8 前掲榊論考（注2）。
- 9 『為房卿記』承暦三年三月二十五日、五月十五日条。『帥記』永保元年（一〇八一）十二月七日程には「但馬堀川宅」と出、これも俊綱宅を指すとみられる。
- 10 「西洞院俊綱朝臣宅」『為房卿記』嘉保二年八月十一日条。
- 11 俊綱の居宅については次の論考中に指摘があり、「三条西洞院」にあつたとするが、「三条」が確認できない。田口稚子「橘俊綱造立の即成院木造聖衆来迎像」（跡見学園女子大学『美学美術史学科報』二四）一九九六年。
- 12 前掲伊東論考（注2）。
- 13 前掲武笠長勢論考（注2）。
- 14 定朝仏や院派仏師の正統性が、院派の喧伝によって鳥羽上皇及び勝光明院造像全般を差配した源師時などその周辺で認識されるに至ったものか。また、鳥羽上皇等から勝光明院像が「近來普通仏也」と評されたことの意味を改めて検討する必要がある。この期における「近來普通仏」とは、まさに円派の造像を指すのではなかったか。
- 15 師時はさらに、造始の儀で円勢は袈裟の下に浄衣を着したといい、それに対して院覚は袈裟の上に浄衣を着したとその相異をことさらに伝えている。造像儀礼の正統性という意味から、このことを検討してみる必要があるろう。
- 16 大治五年（一一三〇）の阿弥陀堂造像は院覚の手になり、この北斗堂に先行して造宮が始められていた三重塔の造像も院覚の担当であり、このあとの保延五年（一一三九）の南御堂九体阿弥陀堂も院覚・院朝の造像であった（以上『中右記』『長秋記』）。
- 17 水野敬三郎「仏師康助資料」（『美術研究』二〇六）一九五九年、『日本彫刻史研究』所収、中央公論美術出版、一九九六年。
- 18 藤原重雄「仏師院恵関係文書」（『陽明文庫講座 図録I』所収）二〇二〇年。
- 19 釈迦堂に対する「華麗」「華美」が中の仏像にまで及ぶのかどうか定かでないが、康助の釈迦三尊像の作風がどのようであったか気にかかる。この造像の翌久寿二年に康助は、藤原忠実による安楽寿院不動明王堂の造像を担当し、現存北向山不動院不動明王坐像がこれに当たり、その大胆な激しい作風が康助のそれと見做されつつある。
- 20 懺法堂が法華懺法堂とすれば普賢菩薩か釈迦如来（三尊）か。なお八条堂自体は九体阿弥陀堂で、長円の造像であった。前掲武笠長円論考（注2）。
- 21 前掲水野論考（注17）。
- 22 翌年八月二十八日に忠実はこの福勝院にて鳥羽上皇五十宝算の仏事を修している（『兵範記』）。
- 23 前掲武笠論考（注6）でこのことを論じている。
- 24 前掲武笠長円論考（注1）。
- 25 前掲小林論考（注2）。
- 26 武笠朗「安楽寿院阿弥陀如来像について」（『佛教藝術』一六七）一九八

六年。なお安楽寿院像に関する最新の研究として次の論考がある。根立研

介「安楽寿院の仏像 付属資料 安楽寿院所在仏像目録」(『鳥羽安楽寿院を中心とした院政期京文化に関する多面的・総合的研究』平成十五～十七年度科学研究費補助金研究成果報告書、研究代表者上島亨、二〇〇七年。

27 院政期の様式展開については次の稿で論じたことがあるが、そこでも安楽寿院像の位置付けの結論は出せていない。武笠朗「院政期中央造像の様式展開」(『実践女子大学文学部紀要』六〇)二〇一八年。

仏師賢円事績年譜

永久二年 一一一四

十一月二十九日供養白河泉殿九体阿弥陀堂(後に蓮華藏院)の丈六九体阿弥陀像を、円勢主導下長円と共に造立する。同日円勢の譲りで法橋となる。(『為房卿記』他)

天治二年 一一二五

五月二十四日、中宮璋子御産御祈の丈六尊勝仏三體、三条殿にて造始。円勢、「弟子両法橋」を率いて造始。両法橋は賢円と長円かとみられる。(『御産部類記』所引『中右記』『為隆卿記(永昌記)』)

大治四年 一一二九

二月二十四日、三条殿にて待賢門院御仏三尺七仏薬師、尊勝、孔雀経明王、半丈六愛染王、同身五体尊等を、長円父子とともに造始する。(『長秋記』※願意は待賢門院御産御祈か。

同年

七月十日、円勢、長円、賢円等が作るころの女院御祈仏を長円弟子の許に運び渡すよう仰せあり。三人は本院御仏を造るためという。(『長秋記』※この時点で、三人は女院御祈(御産御祈か白河院のための御祈仏か)の何らかの造像に当たっていたことが知られる。

同年

閏七月二十日の故白河上皇法事にて供養された待賢門院御願半丈六木像阿弥陀五仏を円勢、長円とともに造立する。中尊円勢、脇侍四体「子法眼法橋」各二体の造像といい、寸法(四尺五寸と五

尺)の意見が合わず相論という。(『中右記』)※脇侍は「三尺観音勢至、地藏龍樹」(『為隆卿記』)とある。観音勢至が長円、地藏龍樹が賢円の分担か。

大治五年 一一三〇

七月二日、白河上皇一周忌に際して造立供養された白河泉殿内新阿弥陀堂の九体丈六阿弥陀像を円勢とともに造像し、円勢の譲りで法眼となる。

(『中右記』『長秋記』彰考館本『僧綱補任』)

長承元年 一一三二

三月十三日供養得長寿院千体観音堂の造像に従事したか。(『中右記』『知信記』『時信記』)※分担した仏師五人に含まれたとみられる。

同年

六月十七日、仏師院覚・賢円、丈六愛染王金輪造始。(『長秋記』)※鳥羽上皇御願とみられるが、願意不明。分担不明。

長承三年 一一三四

六月四日、仏所にて愛染王供養の事々あり、仏師賢円御仏を渡す。供養用途の「案」仏師が調達という。(『長秋記』)

同年

六月十九日、院東対七仏薬師壇所にて五大尊像造始。(『長秋記』)※願意不明。

同年

六月二十五日、待賢門院、鳥羽上皇、得長寿院に御幸し、半丈六不動尊を賢円が、同身金色観音像を院覚が造立し供養された。(『長秋記』)※女院病氣平癒のためか。六月二十一日あたりから御悩。

同年

八月二十一日、『長秋記』記主源師時、藤原家成

八条堀川堂に、賢円作の不動尊と懺法堂小仏をみる。(『長秋記』)※八条堀川堂は長承二年(一一三三)十二月十日供養なので、それ以降の造像になるとみられる。長円の九体丈六、康助の三尊仏もあり。

同年

保延元年 一一三五

閏十二月二十一日、円勢没。(『僧綱補任』)

三月二十七日供養の法金剛院北斗堂の造仏に当たる。御仏「北斗木造」は賢円の造進という。造始は長承三年十二月十五日。(以上『長秋記』)※『御室相承記』によれば、一字金輪一体、北斗七星、九曜、十二宮仏、廿八宿等で、高野御室覚法による供養。

保延二年 一一三六

三月二十三日供養の鳥羽勝光明院の造像に当たり、法印に叙される。(『長秋記』『中右記』)※『長秋記』長承三年(一一三四)四月十九日条から造像の様子が記される。

保延五年 一一三九

十月二十六日供養の崇徳帝御願成勝寺の造像に、長円、円信と子忠円とともに従事し、賞を忠円に譲り法橋とする。(『成勝寺供養式』『僧綱補任』裏書)※仏は不明。

天養元年 一一四四

十月十七日供養の鳥羽院御願仁和寺孔雀明王堂(仏母院)の造像に当たる。十月二十日の造営勸賞に賢円の名が出る。(『本朝世紀』『御室相承記』)※永治元年(一一四一)七月十四日より鳥羽上皇瘡病、七月二十三日より鳥羽殿にて仁和寺

覚法孔雀経法を修し、験あつて八月六日平癒。その前日上皇、一堂を仁和寺に建て一尊を造立することを發願（『御室相承記』）。覚法のための一堂。久安五年 一一四九

同年

三月二十日供養の近衛帝御願延勝寺の造像に当たる。長円、勝円、弟子円春とともに。賞を円春に譲り法橋となす。（『本朝世紀』『僧綱補任抄出』）※金堂、塔、南大門があった。

同年

久寿二年 一一五四

十一月十一日に土御門殿堂にて行なわれた故叡子内親王一周忌法事のための等身大日如来像を造立する。造始は十月二十五日。（『兵範記』）※叡子は鳥羽第四皇女、母美福門院。高陽院太子の養女となり太子に寵愛された。前年十二月八日没。願主は高陽院、その父藤原忠実沙汰の可能性が高い。

同年

五月二十四日、藤原光経（文章博士長光息、敦光孫）昇殿を許される。母は法印賢円の女。（『兵範記』）

同年

五月三十日、弟子円春、長円舎弟阿闍梨殺害の罪で常陸国に配流される。（『山槐記』）

久安六年 一一五〇

七月七日以前、長円没。（『本朝世紀』）

仁平元年 一一五一

六月十三日供養の高陽院御願白河福勝院の造像に康助とともに当たる。仏は丈六九体阿弥陀及び半丈六観音勢至。（『丈六仏像造営文書』『平安遺文』二六一八文書の内（『兵範記』裏文書））

仁平二年 一一五二

三月七日に鳥羽南殿で行なわれた鳥羽上皇五十宝算賀の本尊等身金色釈迦如来像を造立する。前日安置。（『兵範記』）

久寿元年 一一五四

六月八日供養の、藤原頼長発願、鳥羽上皇病氣平癒のための等身薬師坐像一体と高五寸千体薬師立像を造立する。去る三月二十日より造始、近日の

御悩を救うためという。勸賞として馬一疋給わるも、家の貧困を訴えて鴨院南町の戸主を申し出て、頼長に許される。（『台記』）

八月九日供養の鳥羽上皇御願鳥羽金剛心院阿弥陀堂の造仏に院尊とともに当たる。丈六九体阿弥陀像。賢円の譲りで院尊法橋に叙される。釈迦堂釈迦三尊は康助と康朝の造像。（『兵範記』『台記』）

円派仏師の系図（試案）

